

食欲の秋。スポーツの秋。そして、  
読書の秋。そうだ、本を読もう。

# ！！特大号！！

～今月の名言～

どんなに苦しくても生き延びる努力をしろ

百田尚樹「永遠の0」P.239

## ☆突撃インタビュー☆Part. 1

今回は、無類の手塚治虫好きである加藤先生にご協力いただきました！

——本日はよろしくお願います。

加藤先生（以下④）「よろしくお願します」

——早速ですが、手塚治虫を好きになったのはいつごろですか？

④「幼稚園時代ですね。その頃が手塚治虫がアニメーションに力を入れ始めていた時期で、テレビにどんどん手塚治虫のアニメが出てきていたんですよ。手塚治虫はめちゃくちゃ活動期間が長いから、世代によってなんで好きになったかは違うだろうけど、僕らはアニメの手塚治虫の作品を見て好きになった世代」

——最初に見た作品は何だったんですか？

④「『ワンドラスリー』。ワンドーっていうのは英語の“不思議”とあって意味なんだろうけど、テレビの字幕には“W3”って出てくる。宇宙の警察官みたいな人たちが地球を調査しにくるストーリー。それが最初ですね」

——では、一番気に入っている作品は何ですか？

④「やっぱり W3 ですね。最初の方。最後の方はやっぱり『ブラック・ジャック』とかが好きなんですけど、小さい時に見た作品が一番印象に残ってますね」

——W3 は、白黒で放映されたんですか？

④「おそらく白黒ですね。うちのテレビは白黒で放映はカラーだったのかもしれないけど（笑）。元はカラーで描かれてるんだろうけどね」

——『鉄腕アトム』よりも後ですよね。

④「そうですね。アトムは見てなかったわけじゃないけど、一番引き込まれたのは W3 ですね。道具立てがしゃれてたんですよ。W3 たちが乗る巨大な乗り物が車輪の形をしていたんですよ。あと、当時 007 とかも流行っていたんですけど、W3 にもスパイ活動をしている人たちが出てきて、その人たちが 007 もどきの戦いをしてくる。それが両方あったんで、すごく憧れました」

——先生以外にも、周りにも他に手塚治虫好きな人はいましたか？

④「手塚治虫っていう意識はしてなかったと思うけど、作品はみんな観てたよね。もともとその頃は他のチャンネルでもみんなアニメをやっているわけじゃなかった。一週間にそんなに子どもが注目する番組があるわけじゃなかったのだから、絶対みんなおんなじものを見てる感じ」

——どれくらい手塚治虫の作品を見てるんですか？

④「ものすごい数があるから全部は到底読んでないし、すごく大好きな人に比べてたくさん読んでるわけじゃないけど、あまり知られていないような作品が好きなんです。ちょうど漫画も劇画がブームになって、マンガっぽい線が人気なくなって、手塚治虫も連載が打ち切られたりしてたんですよ。その後もあまりうまくいかなくなって、手塚プロが倒産しちゃったり。その、連載が打ち切られた作品が好きなんだよね。一人熱中してた。他の人は相手にしてない作品が好きだったりするんですけど。ちなみにこれはね、『ダスト18』。これがまた涙々のお話なんだよね」

—どんな内容なんですか？

加「飛行機が無人島に墜落するんだけど、その無人島っていうのが奇跡の力を持った島で、18人だけ助かるんだよ。ダスト“18”だから。それで無人島の石のかげらの一つずつ身につけていると死んだはずの人が生き返るんだけど、その石の持ち主の妖精たちが助かった人間たちを追っかけてくるって話なんだよ。

でも、読者にウケなくて、8人ぐらいの人生を描いたところで話が打ち切りになっちゃったんですよ。だから、18ってタイトルだったのに手塚治虫が復刻した時にタイトルを変えて『ダスト8』になっちゃって。しかも途中で終わっちゃったもんだから、このまま尻切れとんぼの作品じゃいけないと思ったのか、手塚治虫が手を入れちゃって、絵も筋も変わってるし……」

—えっ！

加「それが嫌で嫌でしょうがなかったんです。「え、なんで？あれでよかったのになんで変えちゃったの」みたいな。僕にとってはチープになっちゃって、すごく残念だったんです。だから、この『ダスト18』の頃の作品が読めたらなあっていう。そういう感じですね。

人気がなかった時代の手塚治虫が一人好きだったんで。みんなが劇画チックだったり、SFチックな夢のある話よりも、『あしたのジョー』とかそういう方向性の現実の戦いを好んでいる時代に、夢のある話を描いていた。『ダスト18』とかは、人の死につながるから必ずしも夢じゃないけど、ファンタジーなものを描いてたからみんな見向きもしなかった。その時に僕はひたすらそれを読みましたね」

—他にはどんな作品を読んでいましたか？

加「その後に出てきたのが『ブラック・ジャック』だったんです。編集者の人が「手塚先生はもう駄目だから、この作品を最後にしてもう歴史を終わりにしてあげよう。要は引退作にしてあげよう」という感じで。でも、始めちゃったらそれがなぜかウケちゃって、その後ずっと描くことになっちゃうんだけど。そういう状態で始まったんですね、『ブラック・ジャック』が。これも夢中になって読んでましたけど」

—あ〜、わかります。

加「手塚作品って、長いのはやたら長いじゃないですか。『ブラック・ジャック』も何十巻ってあるし、『火の鳥』なんてもう、結局どういう話なのよっていうくらい、とてつもなくスケールが大きいんだよね。そういうのも悪くないけど、意外と、2冊くらいで終わっちゃうような話の方が愛らしくていいんですよ。『ダスト8』は途中で打ち切られちゃったけど、もっと古い作品だと、『キャプテン Ken』なんか2巻くらいなんですけど」

—そうなんですか。

加「飛行タイムマシンで過去に戻ったりするんですけど、反陽子爆弾、いわゆる原爆みたいなもので被爆してしまった母親を救うために、主人公が過去に行くんです。火星が舞台で、話の仕立てはウエスタン。火星人が西部劇でいうところのインディアンなんですけど、そこに地球人がやってきて、火星人を追い出して西部の街みたいなものを作っていくっていう話で。主人公が過去に戻って火星で平和を築き、母を救うために活躍する物語なんです。テーマとしては、いわゆる反核。でも話自体はとてもかわいらしいものがあるって、例えば、火星人はお人形さんみたいな感じで、「ぱびぷぺばぽぶぽ」みたいな、ちょっと意味がわからない言葉をしゃべるんですね。そんな火星人と主人公が友達になって、そういう中から平和を求めていこうっていう」

—読んでみたいです。

加「でも、これもまた人気なかったんですね。もっと人気のある『0マン』の後に連載したのにウケなかったから困ったって。後で読み返してみたらこれはいいぞってすごい思って。だから、手塚治虫の作品を読むときは周りの評判は気にしないで、自分の好きな作品を読むっていうのが大切です。周りがいいって言ってるような作品もいいんだろうけど、そうでないやつの中にも掘り出し物が結構たくさんあって、しかも1冊くらいで終わる作品の中になかなか捨てがたい話がある。その発掘が結構面白いんです。あれだけたくさんあるから、いくらでも発掘できます」

☆加藤先生の止まらぬ手塚治虫愛の行方は…!? 次回、12月号・Part.2に続く！

## 編集後記

図書室には、手塚治作品は『BLACK JACK』『火の鳥』『キャプテン Ken』『ブッダ』『アドルフに告ぐ』『ネオ・ファウスト』があります。

授業では知ることができない先生の一面を知ることができて楽しかったです。加藤先生、ありがとうございました。(2B安田)

加藤先生、インタビュー本当にありがとうございます。いい物が作れました！(2C橋本)

手塚治虫の知らなかった作品についてたくさん知れて良かったです。加藤先生ありがとうございました！(2B清水)